

# discover a whole new world

vol.2

枚方市立中宮中学校英語科

## もうすぐ学期末！

学期末が近づいてきてこれから懇談ですね。そのあとはいよいよ夏休み！でもその前に、通知表を受け取りますね。英語科ではシラバスに書いた通り成績を出します。よく、「テストの点数がめっちゃよかったのに、英語の成績悪いねんけど」という声を聞きます。シラバスにも示している通り、英語科の成績は試験だけでつくわけではありません。定期テスト、小テスト、提出物などに加えて、『発表点』や『パフォーマンステスト点』がつかます。授業でスピーチやスピーキングテストを行っていると思います。また、エッセー課題などを行っています。

英語は、『聞くこと』『読むこと』『話すこと』『書くこと』の4つの技能を25%ずつ成績としてつけることになっています。

『聞くこと』『読むこと』はほとんど定期試験の点数をもとにつけられますが、『書くこと』は定期試験の英作文の部分と、エッセー、『話すこと』は、スピーキングテスト、スピーチでしかつけられません。1学期に通知表は『話すこと』の授業が少なかった学年では、少し偏りがありますが、2学期以降は、25%ずつの成績をつけます。なお、各学年の成績のつけ方に疑問がある場合は遠慮なく、担当の先生に尋ねてください。

## 今年度の英検は、、、

大阪府公立高校入試においては、第2回検定の成績までスコアを提出することができます。ちなみに第2回検定は、中宮中学校会場では、10月6日(土)を予定しています。時間は、受験級によって異なります。なお、申し込みは2学期に入ってから、9月5日(水)までです。

申し込みに関する問い合わせは、各学年の英語の先生に尋ねてください。

## コミュニケーションをとることの大切さ

～CBC テレビ 2018.7.9.配信分

(<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20180709-00010000-cbc-soci&p=1>)

私も海外生活の経験がありますが、外国で生活するとカルチャーショックを受けることがたくさんあります。その文化の違いを外国語で理解するのは難しいことで

す。最近、日本でも話題になっているステーキ店のアメリカのお店を取り仕切っている人のお話をニュース記事で読みましたので、紹介します。やはり、人種は違えど人間同士、コミュニケーションは重要です。

## 本場アメリカでステーキ革命に挑む男

アメリカ・ニューヨークのとある店舗。英語ではあるものの、日本と変わらない朝礼の風景。その中心にいるのが川野秀樹さん。アメリカで展開する『いきなり！ステーキ』を取り仕切っている人物だ。初の海外出店は、2017年2月。ステーキの本場でもあるアメリカ・ニューヨーク。ウォール・ストリートジャーナルにも掲載されるなど大きな話題となり、わずか1年半の間で7店舗を構えた。日本のスタイルをそのまま持ち込み、世界一物価が高いと言われるニューヨークで超低価格のステーキを提供。評判は上々のはずが、1店舗の売り上げは日本の半分。

川野さんは、今年6月からは、家族でニューヨークに移住して、アメリカ展開に全力を注いでいる。「毎日ワクワクします。毎日ね、事件が起こる」その言葉通り、さっそく緊急事態が発生した。急いで駆けつけたのは『5th Ave店』。この店舗で、従業員が不足していたのだという。店長のケルヴィンは、以前から従業員との折り合いが悪く、遂にこの日数名が出勤をボイコットしたのだ。川野さんが急遽他の店から助っ人を集め、事態を収拾。しかし、ケルヴィンからは謝罪の言葉は何もない。

国が違えば、人も文化も違う。この日訪れたのは『TIMES SQUARE店』。ここでは、日本と正反対の試みが行われようとしていた。日本では最大の武器の1つであるテーブルの真ん中の仕切りを取り外すというのだ。その背景にあるのは、アメリカと日本の食文化の違い。例えば2人以上で店に来た場合、日本なら横並びに座るが、アメリカでは向かい合わせで座る。そのため、仕切りがあると顔が見えにくく、メニューをシェアする時にも不便。アメリカの食文化に合わせて、川野さんはあえてスタイルを崩すことを決断した。さらに、メニューにも大きな変更を加えた。アメリカ人にとって、食後のデザートは不可欠。そこで『いきなり！ステーキ』では初となる、デザートを導入したのだ。他にも、日本と異なる考え方がある。日本では好評の調理場の前でグラム数を申告する量り売りも、アメリカでは反応が薄い。お客の4割が「なぜお金を払っているのに、わざわざ注文に行かなければならないのか」と不満を持っていたのだ。アメリカ人ならではの考え方に対応する川野さんだが、全ての声に応えることはできない。なぜなら「特徴のない店になる。それは結構難しいところ」

どこまで独自のスタイルを守り、どこまでお客の声に応えるのか、線引きは難しい。

毎週火曜日は、社員揃っての定例会議。日本とアメリカの間にある高い壁。それを越えるために必要なのは「コミュニケーション」だと川野さんは言う。お互いを知ること。まずは、そこから。さっそく社員から新しく導入したデザートが好評だと報告が上がる。このように、嬉しい情報は全員で共有。しかし、またもや問題発生。切り出したのは、ケルヴィン。3日前から店のWi-Fiが繋がらないという。自分の責任ではないと主張するケルヴィンだが、問題なのは、それを理由に予約客を放置していたこと。「オイ！と言ってもしょうがない。難しいですよね」

お互いを知ることの難しさを痛感している様子の川野さん。一方で、ケルヴィンもコミュニケーションを必要としていた。「川野さんとの一番の問題はコミュニケーション。それができれば、きょうまくいくよ」

このことを川野さんに伝えると「それは嬉しいですね」と笑顔を浮かべた。まだまだこれから。異文化のなかで、川野さんはステーキ革命に挑み続ける。